地域スポーツのコーチのやりがいと困難の内容
―尺度の作成を目指して―

大 橋　　恵 ・ 井 梅　由美子 ・ 藤 後　悦 子 ・ 川 田　裕次郎

Development of Scales Measuring Situations
In which Coaches in Community-based Sports Clubs Are Gratified and Suffer

Megumi M. Ohashi, Yumiko Iume, Etsuko Togo, and Yujiro Kawata

要　旨

地域スポーツとは放課後や休日に学校活動とは別に地域の子どもたちを集めて運営されるスポーツ集団である。本研究は、地域スポーツのコーチが喜びを感じる状況と困難を感じる状況を測定することができる尺度を作成した。オンライン調査で得られた456名の回答を分析した結果、喜びについてはコーチとしての成長、子どもの楽しむ生き生きした姿、子どもたちの成長、コーチとして上手くやれた時の４因子、困難に関しては、問題のある子への対応、親の干渉・関わり、子どもとのコミュニケーション、物理的大変さ、試合における大変さの５因子が得られた。そして資格の有無や競技レベル、実子の有無によってその感じる程度が異なる部分があることが判明した。さらに、喜びを経験する人ほどコーチとしての充実感が高い一方、物理的大変さを除き、困難を経験する人ほどコーチとしての負担感が高いわけではないことも明らかになった。今後はこのデータを元にボランティアである彼らの動機づけを高めるために役立てたい。

キーワード：スポーツコーチ、ボランティア、コーチング、動機づけ

1．問題

2015年10月、日本には、「スポーツを通じて国民が生涯にわたり心身ともに健康で文化的な生活を営むことができる社会の実現を目指すこと」を目標に掲げた、スポーツ庁が新設された。スポーツ庁には、2020年に行われる東京オリンピック・パラリンピックの成功も託されているが、最重点課題は金メダルの大幅増だと報じられている（読売新聞、2015）。この実現へ向けて、スポーツ庁は活躍が見込める競技に強化費を集中する方針であるという。しかしながら、スポーツ庁の目標はこれだけではない。長寿高齢化する社会のなかでいかに健康に長く生活するかは重大な問題であり、スポーツ振興によって健康寿命を長くすることもまた期待されている（鈴木、2016）。そのため、第二回東京オリンピックに向けて急速に子ども達のスポーツを取り巻く環境が整いつつあるが、それはプロを目指す選手の育成のみならず、草の根の健康を目的とするスポーツにもあてはまる。小学生以下を対象としたスポーツ教室の市場規模は近年増え続けており、スポーツ家庭教師という仕事までできている（読売新聞、2016）。

日本では中学生になると学校の部活動があるのでスポーツを行うことは容易であるが、小学校に部活

動はほとんどない。習い事としてのスポーツは可能だが、月謝が高い。そのため、中学生未満の子どもたちがスポーツを行う場として注目されるのが、地域スポーツである。

地域スポーツとは、放課後や休日に学校活動とは別に地域の子どもたちを集めて運営されるスポーツ集団を指す。多くの場合は、ボランティアのコーチに支えられた任意組織であり、入団テストや退団勧告がなく、ほぼ同じ小学校に通う顔見知りの子どもたちで構成されることが特徴とされる（永井、2011）。これらはほとんどの場合、野球、サッカー、バスケットボール等の集団球技を行う。

子どもがスポーツを行うことには、身体の発育促進､体力および運動能力の向上という効果がある（谷口, 2004）。これに加え、放課後の自由な集団遊びが減っている現代では、地域スポーツは社会化の場としての機能も期待される（Coatsworth & Conroy, 2009；大橋・井梅・藤後、2015）。実際に、スポーツ経験者のほうが精神的健康度に加え社会的スキルや自尊心が高いことや（Findlay & Coplan, 2008; Jarvis, 1999）問題行動が少ないことも見出されており（Donaldson & Ronan, 2006）、スポーツには、子どもたちのコミュニケーション能力や思考力や判断力等を育む力があると言える。

このように地域スポーツは現代の子どもの発育上有効だと考えられるが、監視機関が少ないために問題が顕在化しにくく、だからこそ問題が発生しやすい。

高い月謝を徴収しないことが常である地域スポーツは、ボランティア主体の運営であるため、親の貢献抜きでは運営できない。具体的には、必要経費の支払い、練習や試合の際の当番・車出し・付添・応援等数多くの面で子どもたちの保護者の関与が不可欠である（Smoll & Smith, 2002）。そのため、必然的に親子一緒にスポーツに関わる点が特徴である（e.g. Na, 2015）。また、手伝いや選手起用に関する保護者同士のトラブルが発生し、その影響が子どもたちに対するハラスメントという形で起こることがあることが指摘されている（藤後・川田・井梅・大橋、2017）。

子どもたちを技術的に導くコーチをもその保護者たちが務めるケースも多々ある。もちろん、保護者が知り合いに依頼するケースもある。どちらにせよ、地域スポーツのコーチや監督はほぼ無償で子どもたちの指導に当たっている。そのためコーチによる収入は低く、スポーツのコーチあるいは子どもの教育に関する資格を持っている者も20%弱と少ない（大橋・井梅・藤後・川田、2017）。しかしながら、地域スポーツの進展を考えるうえで、その中心人物であるコーチの困難を取り除きやりがいを高めることでその役割を継続してもらうことが重要であろう。

先行研究からはコーチが絡む問題が指摘されてはいるが（Curry, 2013；藤後ら、2017）、コーチが実際の指導現場においてどのような問題に直面していて、どのように問題の解決を行っているのか等については十分な研究が蓄積されているとは言い難い。そのため、今後子どもたちのスポーツに接する機会を保障するためにも、地域スポーツのコーチを支えるための視点を明確にしておく必要があると考えた。以上の事柄より、本研究では、コーチがその役割を継続する要因として、「喜びを感じる状況」「困難を感じる状況」の明確化を目的とする。

自由回答を用いた研究において、既に、コーチを行う上での困難として、親との人間関係および子どもの性格・特性が挙げられることが多く、喜びややりがいとして、実子が同じチームに所属しているかどうかによって差はあるものの、子どもの上達・成長が挙げられることが多いという結果を得ている（大橋ら、2017）。しかしこの研究では様々な回答が得られた一方、対象者数が150名と少なかったために種目による検討ができなかったこと、自由記述法の調査であったために量的な分析が十分に行えないことが問題となった。さらに、自由記述でのデータ収集であったゆえに､記述内容の意図が判りにくいケースも散見された。

そこで、本研究では、自由記述法を用いた調査で得られた回答を手掛かりに、地域スポーツのコーチが「喜びを感じる状況」と「困難を感じる状況」を

量的に測定することができる尺度を作成する。そしてまずは立場や競技レベルによってこれらの喜びや困難が異なるかどうかを検討した。さらに、これらのどの要素がコーチとしての充実感につながっているかも検討した。

2. 方法

⑴ 回答者

調査会社楽天リサーチに委託し、2015年10月にWeb調査を実施した。当該会社の調査モニターとして登録している者の中からテーマを説明した上で匿名にて協力を募った。回答開始前に調査データを統計的に処理し発表する可能性と途中で回答をやめる権利を有していることについて説明を受け了解した上で、協力した。彼らは協力の見返りに買い物等で使用できるポイントを獲得した。

対象者は全国の地域スポーツ（小学生対象のボランティアに近いスポーツ団体）のコーチを過去５年以内に１年以上務めた経験があり、その種目が地域スポーツとしてよく見られる野球･バスケットボール･サッカー（含フットサル）・バレーボールのいずれかにあてはまる者463名（男性419名､女性44名）であった。職業は、会社勤務64.6%、公務員等17.7%、パート・アルバイト2.2%、学生8.0%、自営業・自由業10.3%だった。

⑵ 質問内容

１．自分がコーチしているチームの競技レベル（全国大会出場レベル、地方大会出場レベル、都道府県大会出場レベル、地区大会上位レベル、地区大会中位レベル、それ以下からの選択式）

２．コーチすることによる収入（月額）

３．そのスポーツ関係で自分が保有している資格(自由記述)

４．競技経験。小学校入学以前から大学卒業後まででその競技をコーチ自身が行っていた時期すべてを選択してもらった。

５．喜び。「コーチを行う中で、あなたが喜びややりがいを感じるのはどのような時ですか」と設問を立て、表３に挙げた項目について、とても感じる(6)から全く感じない(1)までの６件法で回答を求めた。

６．困難。「指導する中で、以下のような状況に直面した時、あなたはどのくらいいやだな、困ったなと感じますか」と設問を立て、表４に挙げた項目についてとても感じる(6)から全く感じない(1)までの６件法で回答を求めた。さらに、そのような経験がないコーチのために、経験なし(0)という選択肢も設けた。

７．コーチとしての充実感。コーチとしての充実感ややりがいを測定するために、「あなたは地域スポーツのコーチをすることにやりがいを感じますか」「地域スポーツのコーチをすることであなたの生活はより充実したと感じますか」「あなたは地域スポーツのコーチをすることに負担を感じますか」と尋ね、とてもそう思う(6)から全くそう思わない(1)までの６件法で回答を求めた。

さらに、性別、年齢、種目、コーチ経験年数を尋ねた。その他にもいくつか質問をしたが、本論文では報告しないため省略する。

3. 結果

⑴ 分析対象者

調査に回答したコーチは計463名いたが、チームについての記述からコーチ対象が中学生以上であると明記した５名を分析から除外した（中高校生の外部コーチ４名､社会人チームのコーチ１名)。さらに、コーチ収入がボランティアの範囲を超えていると考えられる２名も分析からは除外した。そのため、分析対象者は456名（男性412名､女性44名）となった。

約半数（57.2%）は実子がそのチームに所属していたことがあると回答した。実子所属率に種目によ

表１　性別と種目のクロス表

	種目				合計
	野球	バスケットボール	サッカー	バレーボール	
男性	169 (98.8%)	46 (71.9%)	159 (95.8%)	38 (69.1%)	412 (90.4%)
女性	2 (1.2%)	18 (28.1%)	7 (4.2%)	17 (30.9%)	44 (9.6%)
合計	171	64	166	55	456

る差は見られなかった（$\chi 2(3) = .155$, *n.s.*）。

種目別の回答者内訳は表1の通りである。全体として女性は少なく、性別比には種目による有意差が認められた（$\chi 2(3) = 73.296$, $p < .0001$.）。すなわち、バスケットボールおよびバレーボールで女性が約30％と多かった。なお、女性の数は少なく分析に堪えないため、以降の分析は性別を考慮せずに行った。

中学時代の部活動を扱った研究において、チームの競技レベルによって、コーチの対応が異なることが指摘されている（藤後・大橋・井梅, 2014）。そこで、本研究ではコーチを務めるチームのレベルを６段階評価で尋ねていた（表２）。種目と資格の有無と実子の所属を独立変数とし競技レベルを従属変数とした分散分析の結果、資格の有無と実子の有無の交互作用効果のみが有意であった。そこで単純主効果検定を行ったところ、実子がチーム内にいるコーチ（パパコーチ）では資格がある群の方がない群よりもコーチをしているチームの競技レベルが有意に高かった（$F(1, 444) = 5.678$, $p < .05$）。一方、実子がいないコーチでは資格の有無による差は見られなかった（$F(1, 444) = .016$, *n.s.*）。なお、全国大会レベル・地方大会出場レベルの頻度が少なかったため、以後、県大会出場レベルと合わせ「県大会出場以上レベル」としてまとめたうえで報告・分析する。

回答者の年齢は18歳から69歳だった（$M = 45.08$、$sd = 9.34$）。実子の所属・資格・競技レベル・種目を独立変数とする４要因の分散分析の結果、種目による有意差は見られなかった。ただし、実子の所属の主効果は有意で、実子が所属している「パパコーチ」の方が（$M = 47.66$, $sd = 7.65$）、そうではないコーチ（$M = 41.62$, $sd = 10.26$）よりも有意に平均年齢が高かった。また資格の有無と競技レベルの交互作用効果が有意であった。資格がない群では、競技レベルの単純主効果が有意であった（$F(3, 409) = 4.710$, $p < .01$）。多重比較によれば、それ以下レベルのほうが県大会出場以上レベルよりも年齢が有意に若かった。資格がある群では、競技レベルの単純主効果は有意ではなかった（$F(3, 409) = 1.176$, *n.s.*）。なお、コーチ経験年数は１年から30年だった（$M = 6.18$、$sd = 5.71$）。

表２　競技レベルと種目のクロス表

競技レベル	種目				合計
	野球	バスケットボール	サッカー	バレーボール	
それ以下	43 (25.1%)	12 (18.8%)	36 (21.7%)	16 (29.1%)	107 (23.5%)
地区大会中位	52 (30.4%)	14 (21.9%)	50 (30.1%)	12 (21.8%)	128 (28.1%)
地区大会上位	45 (26.3%)	13 (20.3%)	44 (26.5%)	12 (21.8%)	114 (25.0%)
県大会	19 (11.1%)	12 (18.8%)	25 (15.1%)	7 (12.7%)	63 (13.8%)
地方大会	8 (4.7%)	11 (17.2%)	9 (5.4%)	5 (9.1%)	33 (7.2%)
全国大会	4 (2.3%)	2 (3.1%)	2 (1.2%)	3 (5.5%)	11 (2.4%)
合計	171	64	166	55	456

⑵ 保有資格

そのスポーツ関係で自身が保有している資格を挙げるように依頼したところ、その種目のコーチ資格、スポーツ指導員、体育の教員免許等、小学生のスポーツ指導に関する資格の保持率は23.2％であった。審判資格を挙げる者がいたが、指導資格ではないため、本研究では資格なしとみなした。

⑶ コーチとしての充実感

充実感を測定するために３つの質問を設けていた。全体で相関係数を算出したところ、コーチ役にやりがいを感じる人ほどコーチとしての生活に充実感を感じているが（$r(456) = .755$, $p < .0001$）、やりがいと負担感、生活充実感と負担感との負相関は弱かった（$r(456) = -.265$, $p < .0001$；$r(456) = -.294$, $p < .0001$）。つまり、コーチ役に充実感ややりがいを感じることは、負担感とはあまり関係が見られなかった。そこで、「充実感」として２項目の合計値を作成し、負担感は別の指標として以下の分析に用いた。

負担感が少ないほど充実感は大きいという有意な相関関係が認められた（$r = -.298$, $p < .0001$）。なお、コーチ資格を有する者の方が（$r = -.477$, $p < .0001$）有さない者（r

= −.236, p < .0001）よりも有意にこの関係が強かった（z = 2.495, p < .05）。

種目と資格の有無と実子の所属と競技レベルを独立変数とした分散分析を行った結果、どちらの変数についても有意な主効果・交互作用効果が見られなかった。コーチとしての充実感を感じることは、ハードの問題ではないことが伺われる。

⑷ 因子分析：喜び

自由回答を用いた調査（大橋ら、2017）での記述に基づき作成した19項目について因子分析（主因子法プロマックス回転）を行い、４因子を得た（累積説明率58.3%）。因子抽出後の共通性は.32を超えていたが、２つ以上の因子に乗る項目が２つあった。そこで、これらの項目を除いて再度因子分析を行い、表３の通りの結果を得た。

因子１は15.子どもたちの親から感謝の言葉をかけられたとき、18.他のチームから自分のチームのことをほめられたときと関連が深いため、「コーチとしての成長」と名付けた。因子２は８.子どもたちが楽しんでプレーしているとき、９.子どもたちの生き生きした姿を見たときと関連が深いため、「子どもの楽しむ生き生きした姿」と名付けた。因子３は２.自分たちのチームの試合内容が良かったとき、５.子どもの競技面での成長・上達を実感したときと関連が深いため、「子どもたちの成長」と名付けた。因子４は11.子どもたちの相談に自分がうまく対応できたとき、12.子どもたちに頼ってもらったときと関連が深いため、「コーチとして上手くやれたとき」と名付けた。それぞれの因子に関連する質問項目の平均値を使用し、以降の分析を行った。

⑸ 因子分析：困難

自由回答を用いた調査（大橋ら、2017）での記述

表３　喜びに関する因子分析の結果（主因子法プロマックス回転）

項目	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	共通性
15. 子どもたちの親から感謝の言葉をかけられたとき	.776	.049	−.116	.074	.615
18. 他のチームから自分のチームのことをほめられたとき	.670	−.083	.266	−.030	.618
20. 親達と何気ない雑談（コミュニケーション）をするとき	.655	.080	−.038	−.046	.410
19. 他のチームから選手のプレーをほめられたとき	.632	−.074	.280	−.058	.557
14. 子どもたちから感謝の言葉をかけられたとき	.517	.241	−.146	.248	.565
17. 自分がコーチとしてスキルアップしたと感じたとき	.498	−.077	.048	.246	.453
8. 子どもたちが楽しんでプレーしているとき	.027	.903	−.013	−.081	.745
9. 子どもたちの生き生きした姿を見たとき	.028	.901	.023	−.057	.807
4. 子どもの笑顔を見たとき	.041	.665	.059	.025	.547
2. 自分たちのチームの試合内容が良かったとき	.175	.024	.736	−.195	.578
5. 子どもの競技面での成長・上達を実感したとき	−.168	.147	.665	.132	.589
3. 子どもたちのチームワークが良いとき・良くなったとき	.106	.154	.621	−.085	.562
6. 子どもの精神面での成長・上達を実感したとき	−.099	.198	.600	.159	.633
1. 自分たちのチームが試合で勝利したとき	.117	−.158	.588	.017	.328
7. 練習や試合への子どもの積極的な態度に接したとき	−.120	.255	.507	.179	.574
11. 子どもたちの相談に自分がうまく対応できたとき	.091	−.097	.067	.815	.744
12. 子どもたちに頼ってもらったとき	.163	.021	−.068	.779	.748
因子間相関　因子 1		.404	.549	.629	
因子 2			.687	.544	
因子 3				.535	

除外項目：10. 子どもが卒業後もその種目を続けてくれたと知ったとき
13. 自分がうまく子どもたちに説明することができたとき

に基づき作成した20項目について、そのような状況を経験したことがないと回答した場合には欠損値と扱ったうえで、因子分析（主因子法プロマックス回転）を行い、５因子を得た（累積説明率53.3%）。因子抽出後の共通性が.30未満の項目（３番、19番）および、２つ以上の因子に乗る項目２つ（18番、20番）を除いて再度因子分析を行い、表４の通りの結果を得た。

因子１は子どもたちに真剣み・集中力がないとき、子どもの礼儀作法が悪いとき（挨拶できない、道具扱いが悪い等）と関連が深いため、「問題のある子への対応」と名付けた。因子２は親たちがベンチや応援席から指示を出しているとき、親たちが「わが子中心」なかかわりかたをしているときと関連が深いため、「親の干渉・関わり」と名付けた。因子３は子どもたちを怒らなくてはいけないとき、子どもたちが言うことを聞かないときと関連が深いため、「子どもとのコミュニケーションの問題」と名付けた。因子４は交通手段の確保や他団体との交渉等をしなくてはならないとき、寒い日や暑い日・朝早くから等、物理的に厳しい状況で練習するときと関連が深いため、「物理的大変さ」と名付けた。因子５は親が試合や練習の応援にあまり来ないとき、試合に出す子どもを決めるときと関連が深いため、「試合における大変さ」と名付けた。それぞれの因子に関連する質問項目の平均値を以降の分析に用いた。

表４　困難に関する因子分析の結果（主因子法プロマックス回転）

項目	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	因子 5	共通性
8. 子どもたちに真剣み・集中力がないとき	.982	−.064	−.157	−.006	.010	.731
10. 子どもの礼儀作法が悪いとき（挨拶できない、道具扱いが悪いなど）	.672	.079	.261	−.031	−.264	.667
9. 子ども同士のもめごとや競い合いがあるとき	.582	−.031	.130	.018	.087	.514
7. すぐ泣く子・わがままな子・しつけが足りない子がいるとき	.565	−.080	−.076	.131	.160	.420
5. 子どもが怪我をしたとき	.458	.068	.067	−.165	.087	.261
4. 練習の成果が出ないときや試合で負けたとき	.440	.020	−.041	.096	.203	.355
16. 親たちがベンチや応援席から指示を出しているとき	−.027	.888	−.092	.004	−.040	.692
17. 親たちが「わが子中心」なかかわりかたをしているとき	−.115	.831	.054	−.015	.072	.679
15. 親が選手起用や練習方法に対して口出しをしてくるとき	.147	.686	−.043	.050	.050	.602
11. 子どもたちを怒らなくてはいけないとき	−.135	−.121	.820	.003	.164	.588
12. 子どもたちが言うことを聞かないとき	.115	−.007	.755	.064	−.075	.703
13. 子どもたちに自分の言葉がうまく伝わらないとき	.129	.141	.540	−.037	.074	.537
2. 交通手段の確保や他団体との交渉などをしなくてはならないとき	−.025	−.050	−.015	.854	−.049	.657
1. 寒い日や暑い日・朝早くからなど、物理的に厳しい状況で練習するとき	.008	.131	.089	.580	.009	.468
14. 親が試合や練習の応援にあまり来ないとき	.053	.116	.031	−.060	.497	.315
6. 試合に出す子どもを決めるとき	.091	−.052	.182	.012	.447	.350
因子間相関　因子 1		.463	.696	.562	.418	
因子 2			.464	.242	.259	
因子 3				.463	.420	
因子 4					.333	

除外項目：３. 子どもたちが基礎練習に使える時間が短いこと
18. 親たちが試合や練習を見ているとき
19. コーチ間で指導内容・指導方針での食い違いがあるとき
20.（一部の）親が気を遣ってくること

表５　競技レベルごとの、喜びを感じる状況

チームの競技レベル		コーチとしての成長	子どもの楽しむ生き生きした姿	子どもたちの成長	コーチとして上手くやれた時
それ以下	*M*	4.51	5.37	5.15	4.73
	(*sd*)	(0.75)	(0.70)	(0.63)	(0.87)
	n	107	107	107	107
地区大会中位	*M*	4.57	5.38	5.27	4.77
	(*sd*)	(0.76)	(0.71)	(0.61)	(0.83)
	n	128	128	128	128
地区大会上位	*M*	4.59	5.42	5.32	4.75
	(*sd*)	(0.73)	(0.66)	(0.52)	(0.95)
	n	114	114	114	114
県大会出場以上	*M*	4.62	5.55	5.41	4.86
	(*sd*)	(0.89)	(0.52)	(0.50)	(0.83)
	n	107	107	107	107
合計	M	4.57	5.43	5.29	4.78
	(*sd*)	(0.78)	(0.66)	(0.58)	(0.87)
	n	456	456	456	45

⑹ 分散分析：喜び

各因子について、資格の有無、実子の所属、競技レベルを独立変数とした３元の分散分析を行った。種目も要因に入れることを予定していたが、資格の有無と競技レベルに関連性が高く、レベルが低いチームで教えている有資格者が少ないため、種目によっては分析に堪えないことが判明した（例えば、それ以下レベルの野球の指導資格保持者は１名）。すべて集団で行う球技という意味では類似していると考え、種目については要因に入れなかった。競技レベルのごとに平均値・標準偏差を算出したものが表５である。

その結果、子どもの楽しむ生き生きした姿因子については、実子の所属の主効果が有意傾向になった（F (1,440) = 3.782, p < .07）。実子がいるコーチの方が（M = 5.50, sd = .60）、いないコーチよりも（M = 5.34, sd =.72）、子どもたちの楽しむ生き生きとした姿に有意に強くやりがいを感じる傾向が見られた。

また、子どもたちの成長因子については、実子の所属の主効果が有意傾向になった（F (1,440) = 3.375, p < .07）。実子がいるコーチの方が（M = 5.36, sd = .54）、いないコーチよりも（M = 5.19, sd = .60）子どもたちの成長をより強く感じていた。また、競技レベルの主効果も有意傾向になった（F (3,440) = 2.517, p < .06）。多重比較によれば、県大会以上レベルのほうがそれ以下レベルよりも子どもたちの楽しむ生き生きとした姿にやりがいを感じやすい傾向があった（p < .06）。

なお、コーチとしての成長因子およびコーチとして上手くやれたとき因子については、どの主効果・交互作用効果も有意ではなかった。また、資格の有無による主効果・交互作用効果も有意ではなかった。

⑺ 分散分析：困難

困難の５因子についても同様の分散分析を行った。この際、このような状況の経験がないという回答は分析から除外したため、総データ数が因子によって異なる。分析対象者の比率は概ね高く、それぞれ91.9%、83.8%、95.2%、89.9%、88.2%であった。実子の有無による差は全体的に少なかったため、指導資格の有無と競技レベルのごとに平均値・標準偏差を算出した（表６）。

まず、問題のある子への対応因子については、資格の有無と競技レベルの有意な交互作用効果が認められた（F (6,403) = 5.029, p < .01）。資格あり群では競技レベルの有意な単純主効果が認められ（F (3,403) = 4.269, p < .01）、県大会出場以上レベルよりもそれ以下レベルの方がこの内容を有意に多く挙げており、県大会出場レベル以上よりも地区大会中位レベルの方がこの内容を多く挙げる傾向が見られた。一方資格なし群では、競技レベルの有意な単純主効果が認められなかった（F (3,403) = .993, n.s.）。

親の干渉・関わり因子については、資格の有無の主効果（F (1,366) = 7.711, p < .01）が有意であった。具体的には、資格があるコーチの方が（M= 5.64, sd =1.33）資格がないコーチよりも（M = 5.13, sd = 1.21）親の干渉・関わりに困難を大きく感じていた。

子どもとのコミュニケーションの問題因子については、競技レベルの主効果（F (3, 418) = 4.296, p < .01）および資格の有無と競技レベルの交互作用効

果（F（3,418）= 6.046, p < .0001）が有意だった。

資格あり群では競技レベルの有意な単純主効果が認められ（F（3,418）= 6.761, p < .0001）、地区大会中位・上位レベルの方が県大会出場以上レベルよりも子どもとのコミュニケーションの問題を有意に多く挙げており、それ以下レベルの方が県大会出場以上レベルよりもこの内容を多く挙げる傾向が見られた。一方資格なし群では、競技レベルの有意な単純主効果が認められなかった（F（3,418）= .176, *n.s.*）。

物理的大変さ因子については、資格の有無と競技レベルの主効果が有意であった（F（1,394）=3.784, p < .05; F（3,394）= 4.889, p < .05）。つまり、資格なし群の方があり群よりも物理的大変さが有意に高く、地区大会中位レベルの方が県大会以上レベルよりも物理的大変さが有意に高かった。

試合における大変さ因子については、競技レベルの主効果が有意であった（F（3,386）=3.049, p < .05.）。また、資格の有無と競技レベルと種目の交互作用効果も有意に近かった（F（6, 357）= 2.200, p < .06）ため、単純主効果の検定を念のため行った。その結果、資格あり群では競技レベルの有意な単純主効果が認められ（F（3,386）= 3.655, p < .05）、地区大会上位レベルの方が県大会出場以上レベルよりも試合における大変さを有意に多く挙げており、それ以下レベルの方が県大会出場以上レベルよりもこの内容を多く挙げる傾向が見られた。一方資格なし群では、競技レベルの単純主効果は有意ではなかった（F（3,386）= .089, *n.s.*）。

⑻ 変数間関係

喜びおよび困難なことに関して、相互の関係を見るため、相関係数を算出した（表７）。その結果、弱い相関ではあるが、困難を感じる人ほど喜びも感じていた（.1 < r < .25：ただし物理的大変さ以外）。コーチとしての役割に深くかかわる程度が両方に関係しているのだろう。

コーチとしての充実感との関連を見たところ、充実感を損なうのは困難のうち物理的大変さのみであった。つまり、困難を経験するからといってコーチとしての充実感が低められることは、物理的困難を除外すれば、なかった。一方、喜びは全種類がコーチとしての充実感を高めていた。

コーチの負担感との関連を見たところ、負担感を増強するのは困難のなかでは物理的大変さのみであった。つまり、困難を経験するからといって負担

表６　指導資格の有無ごとの、困難を感じる状況

チームの競技レベル		資格なし					資格あり				
		問題のある子への対応	親の干渉・関わり	子どもとのコミュニケーション	物理的大変さ	試合における大変さ	問題のある子への対応	親の干渉・関わり	子どもとのコミュニケーション	物理的大変さ	試合における大変さ
それ以下	*M*	4.35	4.21	3.75	3.00	3.13	3.99	4.14	3.83	3.56	3.04
	(*sd*)	(0.82)	(1.30)	(1.36)	(0.87)	(1.08)	(1.08)	(1.24)	(1.04)	(1.26)	(1.18)
	n	16	14	16	15	15	76	73	84	76	76
地区大会中位	*M*	4.13	4.98	4.24	3.38	2.97	3.94	4.00	3.77	3.37	2.99
	(*sd*)	(0.91)	(1.22)	(0.89)	(1.05)	(1.06)	(0.80)	(1.15)	(1.02)	(1.02)	(0.82)
	n	30	27	29	28	29	88	83	93	89	86
地区大会上位	*M*	3.99	4.71	3.80	2.94	3.19	4.02	4.09	3.85	3.28	3.05
	(*sd*)	(1.01)	(1.31)	(1.01)	(0.94)	(1.18)	(0.85)	(1.10)	(1.06)	(1.12)	(1.01)
	n	28	25	27	27	26	81	74	83	78	76
県大会出場以上	*M*	3.43	4.44	2.94	2.52	2.31	4.17	4.33	3.90	3.09	3.01
	(*sd*)	(0.95)	(1.46)	(1.06)	(1.20)	(1.07)	(0.74)	(1.34)	(0.95)	(1.13)	(1.08)
	n	29	22	29	27	26	71	64	73	70	68
合計	*M*	3.93	4.64	3.67	2.96	2.88	4.02	4.13	3.83	3.33	3.02
	(*sd*)	(0.98)	(1.33)	(1.16)	(1.07)	(1.14)	(0.88)	(1.21)	(1.02)	(1.14)	(1.02)
	n	103	88	101	97	96	316	294	333	313	306

感が増すことは、物理的困難を除外すれば、なかった。一方、喜びは子どもたちの楽しむ生き生きとした姿を見ることや子どもたちの成長を感じることに弱いながらもコーチの仕事の負担感を減らす効果が見られた。

4. 考察

本研究は、地域スポーツのコーチたちがボランティアで指導を続ける要因の解明を目指すプロジェクトの一環として、コーチが「喜びを感じる状況」と「困難を感じる状況」を測定することができる尺度を作成した。その結果、コーチたちの喜ぶ状況に関しては、コーチとしての成長、子どもの楽しむ生き生きした姿、子どもたちの成長、コーチとして上手くやれた時の４因子が得られた。コーチたちが困難に感じる状況に関しては、問題のある子への対応、親の干渉・関わり、子どもとのコミュニケーション、物理的大変さ、試合における大変さの５因子が得られた。そしてそれぞれについて分散分析を行った結果、実子の有無や資格の有無、競技レベル等によってどのような喜びや困難を感じやすいかは異なることが明らかになった。また、相関関係の分析により、喜びを感じるからコーチとしての充実感が高くなる、困難を感じるからコーチとしての負担感が高くなるという単純な関係ではないことも明らかになった。

一方で、本研究では回答者数の問題で種目ごとの検討が行えなかった。地域スポーツとして典型的なものだけでも、野球、サッカー、バスケットボール、バレーボールとある。各種目の特性によって典型的なコーチの言動については種目による差があることが予想される（Chelladurai, 2007; Small & Smith, 1989）。そのため、今後は種目による差の検討も必要であろう。

また、そもそもコーチとしての喜びや困難を測定した理由はコーチの継続意欲に影響すると考えたからである。しかし今回は継続意欲との関連まで検討が及ばなかった。今後は、継続意思を促進する要因として何が影響しているのか、継続意思を抑制する要因として何が影響しているのか等因果関係について検討を深めたいと考える。そして、地域スポーツのコーチが継続するための要件を探っていきたい。

表7　因子同士の相関係数

	困難１	困難２	困難３	困難４	困難５	喜び１	喜び２	喜び３	喜び４
困難２	.409**								
困難３	.646**	.407**							
困難４	.411**	.178**	.368**						
困難５	.460**	.272**	.449**	.276**					
喜び１	.232**	.207**	.266**	.043	.214**				
喜び２	.106*	.165**	.142**	-.159**	.121*	.435**			
喜び３	.206**	.236**	.150**	-.127*	.061	.560**	.670**		
喜び４	.195**	.176**	.237**	.072	.187**	.657**	.441**	.510**	
充実感	.013	.063	.067	-.230**	.015	.294**	.326**	.390**	.268**
負担感	.094	.062	.048	.397**	.092	-.045	-.144**	-.108*	.004

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

5. 引用文献

Chelladurai, P.（2007）. Leadership in sports. In G. Tenenbaum., & R. C. Eklund（Eds.）, *The Handbook of Sport Psychology*（3rd ed.,）. NewYork: Wiley. Pp.113-135

Coatsworth, J. D., & Conroy, D. E.（2009）. The effects of autonomy-supportive coaching, need satisfaction, and self-perceptions on initiative and identity in youth swimmers. *Developmental Psychology*, **45**(2), 320-328.

Curry, T.（2013）. Making the transition from parent to coach. *The Exceptional Parent Magazine,* **43**(10), 10-11.

Donaldson,S.J.&Ronan, K. R.（2006）. The effects of sports participation on young adolescents' emotional well-being. *Adolescence*, **41**, 369-389.

Findlay, L.C. & Coplan, R. J.（2008）. Come out and play: Shyness in childhood and the benefits of organized sports participation. *Canadian Journal of Behavioural Science*, **40**(3), 153-161.

Jarvis, M.（1999）. *Sport Psychology*. London: Taylor & Francis Book.（工藤和俊・平田智明（訳）　2006　スポーツ心理学入門　新曜社.）

Na, J.（2015）. Parents' perceptions of their children's experiences in physical education and youth. *Sport. Physical Educatore*, 72（1）, 139-168.

永井洋一（2011）. 少年スポーツ―ダメな大人が子供をつぶす―　朝日新書.

大橋　恵・井梅由美子・藤後悦子（2015）. 地域スポーツにおける親子の喜びと傷つき―自由記述法による検討―　東京未来大学研究紀要, 8, 27-37.

大橋　恵・井梅由美子・藤後悦子・川田裕次郎（2017）. 地域におけるスポーツのコーチの喜びと困惑―コーチ対象の調査の内容分析―　コミュニティ心理学, 20（2）（ページ数未定）

Smoll,F.L,& Smith,R.E.（2002）. *Children and youth in sport*. St. Louis: Kendall/Hunt.（市村操一・杉山佳生・山本裕二（監訳）(2008). ジュニアスポーツの心理学 大修館書店.）

Smoll,F.L,& Smith,R.E.（1989）. Leadership behaviors in sports: A theoretical model and research paradigm. *Journal of Applied Social Psychology*, 19（18）, 1522-1551.

鈴木大地（2016）. 平成二十八年　年頭の所感 http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/choukan/detail/1365744.htm（2016.2.1.アクセス）

谷口幸一（2004）. 発達から見た身体活動・運動と身体的健康. 日本スポーツ心理学会（編）最新スポーツ心理学：その軌跡と展望　Pp.99-108. 大修館書店.

藤後悦子・川田裕次郎・井梅由美子・大橋　恵（2017）. 小学生の地域スポーツにかかわる親のスポーツペアレンティング　コミュニティ心理学, 21(1)（ページ数未定）

藤後悦子・大橋　恵・井梅由美子（2014）. 中学時代の運動部における指導者の影響(1)－チーム制と個人制との比較.　日本心理学会第78回大会発表論文集1148

読売新聞（2015）. 健康づくりも使命－スポーツ庁発足－　2015年10月 2 日日刊p.26

読売新聞（2016）. スポーツBizワールド　参加・体験 8　2016年 2 月12日日刊p.20

（おおはし　めぐみ）東京未来大学
（いうめ　ゆみこ）東京未来大学
（とうご　えつこ）東京未来大学
（かわた　ゆうじろう）順天堂大学